

迎春



住職 成田 大航

令和七年の初陽を迎え、檀信徒の皆様におかれましては日々ご清栄の事とお慶び申し上げます。昨年あたりからは、コロナの恐怖も薄れ、ほぼ日常が戻って参りました。感染者は依然として多いながらも、重症化のリスクは少なく、海外からの観光客も増えて京都市内も賑わいを取り戻してきました。盛んに話題となる、「若者世代への投資がもつと進んで、明るい「未来の光」が少しでも差し込んでくれたらと願ってやみません。

本堂屋根替えにつきましては下記総代様のご報告の通り、何とか本年度中には落慶の予定で進んでおります。P6には施工業者、大下工務店様からの進捗状況報告がありますのでご覧下さい。総代・役員様にはこの数年間ご苦勞をお掛け致しました。特に総代様には計画立案から資金計画まで幾度となく会議を重ねて実現していただきましたこと、感謝の到るに耐えません。具体的な日程は決まっておりますませんが、完成後には落慶式及び「秘仏・文殊菩薩ご開帳」を計画しております。おおよその日程が決まり次第ご案内を致しますのでお待ち頂きたく存じます。

昨年は朝暉神社創建二百年の節目に当たり、福知山城天守閣にて朝暉神社創建二百

在の建屋で約一八〇年間ほぼ当時のままの建屋として残っております。但し屋根については昭和三十六年に葺きから瓦葺きに葺き替えております。又本堂の西側にあった文殊堂は平成二十年に圓覚寺創建四百年記念事業として新しく建て替えられた事は皆様よくご承知と思います。依って本堂においては再々建以降はほとんど手つかずの為、近年各所で相当の傷みが確認されておりました。十年ほど前の総代会において改修工事の計画が持ち上がり、以後「令和の大改修工事」と位置づけて取り組んでまいりました。試行錯誤しながら檀家様のご理解ご協力、又ご支援を頂いてようやく施工業者との契約に至り、昨年早々から工事に掛かることが出来たのであります。役員もその間交代などがあり、この計画に最初から関わってきたのが私一人になり次に芦田幸雄総代がその後長期に渡り加わってくれています。そんな経緯の中で令和六年度中には工事は完成する予定ですが、今は無事に完了を祈ると共に一方では楽しみにしている所であります。思えば今日に至るまでには次から次へ難題に見舞われたことも事実であります。

まず、一つは檀家さんからのご志納に頼らなければこの工事は進まないわけでこの計画にご理解して志納して頂けるだろうかとの資金の心配や、途中でのコロナによる社会環境の変化、又世界の地域紛争に伴う化石燃料価

年と朽木家まつわる文物一般公開がありました。圓覚寺所蔵の「朝暉神社御神体遷座の図」も貸し出し展示を行い、「両丹新聞に六回の連載記事が掲載されて詳しく説明がされました。本号では、筆者である京都府立大学共同研究員、西村正芳先生にお願いを致し、P4〜5に解説を頂きましたので是非お読みください。更には「無理をお願いして一月十二日の大般若法要に先立ち、十時よりご講演を頂く事になっております。遷座の図」

謹賀新年



代表総代 伊東 高志

新年明けましておめでとうございます。菩提寺並びに各檀家の皆様方には良き新春を迎えられたこと心よりお喜び申し上げます。日頃は圓覚寺護持会には大変なご理解ご協力、ご支援を賜っておりますこと年頭に当たり厚く御礼を申し上げます。

さて、圓覚寺は慶長十三年（一六〇八）に大超智仙大和尚によつて創建されて以来、今年で四一七年目を迎えました。その間江戸か

格の上昇や円安による建設資材などの値上がり、また計画途中で本堂が府の暫定登録有形文化財に指定されたことにより一部計画の見直し等本堂に予期せぬ事態が起きて、その都度色々考えると寝付かれない時もしばしばあったことが蘇ってきます。しかしこの厳しい世情の中で敢えて決断したことが、後々あの時改修をしておいてよかつたと思つてもうらやましいです、そのようにあつてほしいと思う所です。

一方、各寺院には住職のご家族の住む所として庫裏が敷地にありますが、圓覚寺では以前は本堂の中に家族で住んでおられたと聞いておりましたが、先々代十五世藤井覚章大和尚の時に本堂の東側に新たに庫裏を建てられたとお聞きしました。しかし今日、副住職の結婚を機にお孫さん達も含め同居するには以前の庫裏では狭いということで部屋の増設を考えられていたようですが、新たに棟を建てるには敷地も少なく建築基準法の問題で最終的には建て替えざるを得ないことになったようです。本来であれば庫裏の建て替えとなれば大事業ですので護持会も一緒になって進めないといけない事柄ですが、護持会としてはすでに本堂工事計画の途中でもあり、当時は庫裏の改築と言う大きな事業を同時に手掛ける余裕もないのもう少し先延ばしをすればとの趣旨をお寺さんの方に言ったのですが、お孫さんの就学等の希望もあり逆

格の上昇や円安による建設資材などの値上がり、また計画途中で本堂が府の暫定登録有形文化財に指定されたことにより一部計画の見直し等本堂に予期せぬ事態が起きて、その都度色々考えると寝付かれない時もしばしばあったことが蘇ってきます。しかしこの厳しい世情の中で敢えて決断したことが、後々あの時改修をしておいてよかつたと思つてもうらやましいです、そのようにあつてほしいと思う所です。

掛け軸も展示いたしますので、是非ご傾聴頂ければ幸いです。最近、檀家さんのお家の仏壇開眼をしたのですが、モダンでコンパクトなお仏壇でしたので、「今風でよい感じですね」とお話しすると、「実はネットで買いました」ということでした。確かにいつものネット通販で宅配便の人が配達してくれる訳で、仏壇はダメですという事はありません。ついにそういう時代になったんだなあと思感するとともに、そういえば、お坊さんもネットでも注文する時代、仏壇くらいは当たり前かと変に納得してしまつた事でありました。激変する時代ではありますが、肅々と本来のお寺の役目を考えてゆきたいと思ひます。

ら令和へと六つの時代を乗り越えて、現在の第十七世成田住職まで十六代の大和尚に受け継がれ、各檀家の先祖供養や檀家各位の心の拠り所としての繋がりを守つてまいりました。ただ建物について創建当時本堂を含む建屋がどのようなものであつたかは解りませんが、本堂については江戸時代に二回火事に遭つたとの事で一回目は享保七年に、二回目は天保一五年に焼失した記録があり天保時代に再々建されたのが現

に出来るだけ早く建てたいとのことでありました。当時護持会としては資金的な面や、相談に乗る余裕もないのでお寺さん主導でやつていただけるならと言うことで庫裏改築の件は同意させてもらいました。従つて資金はこの時点で全てお寺さんの方で工面されたようです。ただ建物の登記は住職の個人登記ではなく、宗教法円覚寺として登記をしていますので、将来のことも考えて護持会としても資金負担の一環として支払える範囲で特別会計からお支払いすることにしました。菩提寺と檀家にとつては令和七年はこの二大建築事業が偶然同時に完成すると言う大きな躍進節目の年になりそう、又、奇しくも今年には秘蔵文殊菩薩の十七年目の御開帳の年でもあります。時代の波もどんどん変化し、世の中は宗教に対する考え方や葬儀などの有り方など特にコロナ以降大変な変化をしておりますし、核家族の進行に伴う檀家離れも年々進んで行くようです。

そのような中で、十三教区の中でも次第に世交代が進んできており圓覚寺においてもいずれは通らないといけない大行事であり、お寺さんもこの令和の二大事業の完成が所謂晋山式と言う行事のお膳立てになり、その実施時期を考へられておられることでしょう。四百年超に渡り先人達が培ってきた菩提寺と檀家との関係が、今後も先祖供養と檀家各位の心の支えの場として、次の代から又その次の代へと末永く続くことを願つて止みません。 合掌

朝暉神社御鎮座二百年と圓覚寺所蔵の「朝暉神社城址遷座の図」

京都府立大学共同研究員 西村 正芳

朝暉神社と朽木家

福知山城の天守と小天守の東側には鳥居と本殿を構える朝暉神社(あさひじんじや)が鎮座しています。福知山城公園のことを「あさひさん」と呼ぶのはこのためです。祭神は福知山藩主朽木家の初代藩主植昌の父植綱で、藩を起したことから「藩祖」と呼ばれています。

寛文九年(一六六九)常陸国土浦から福知山に移った朽木家は、一〇代綱方の代の文政三年(一八二〇)に福知山領知一五〇年を迎え、三月に祝賀式が行われました。全戸に酒肴を配り、老人や善行の者に褒賞を与えています。祝賀式を終えた綱方は六月に隠居し一代綱條が跡を継ぎ、文政七年(一八二四)に現在の岡ノ上、以前西山ストアがあつた場所に朝暉神社が勧請・創建しました。江戸築地の藩邸には、文政四年に植綱を御神霊とする神社が勧請されており、福知山へ

の勧請は先代綱方の意志を継いだ綱條の意向により、一宮神社の宮司福林雅楽に勧請とその後の守護を命じました。

綱方が藩主となつてから、文化四年(一八〇七)と文政二年(一八一九)には城下の大半を焼く大火が続きました。綱方は福知山領知一五〇年を領民たちと祝い、朝暉神社を城内でなく、あえて城外に建立することで、民衆の安堵と藩への敬愛を願つたのではないのでしょうか。

藩祖植綱は関ヶ原合戦に西軍で参陣した近江朽木谷の朽木元綱の三男で、元和九年(一六二二)、將軍家光の供として上洛し、この年に一千石の領地を賜りました。加増を重ね寛永九年(一六三二)には四一〇石を所領することになります。幕府の要職「六人衆」に抜擢され、四年後には下野国鹿沼一万石の大名となり、加増は続き慶安二年(一六四九)三万石で常陸国土浦で初めての城持大名となります。近江の旗本の分家から一代で朽木本家を凌ぐ存在となつたことは、植綱の手柄や才能が優れ、いかに家光に重用されていたかを物語っています。

植綱は植昌が福知山に移つて以降、藩祖として神格化されていくことになり、延宝九年(一六八二)には「木造朽木植綱坐像」(福知山市重要資料・朝暉神社所蔵)が制作されています。文政七年、岡ノ上に創建された朝暉神社には、境内地に能舞台も建築され、春と秋の例祭には能楽が演じられるなど三丹地方の名物になったといわれています。

朝暉神社城址遷座と圓覚寺所蔵遷座の図

明治四年(一八七二)七月の廃藩置県により、元藩主で福知山県知藩事であつた三代朽木為綱は九月に東京に移りました。為綱の江戸移住にあつては、同年の八月に旧藩領の百姓一同から為綱の住居取次中に宛て、「今後、住居を福知山に構えられるのであれば一回で尽力させていただきます」と申し入れを行っています。

為綱はこれに応えたものか、翌五年五月、病身を理由に家督を綱鑑に譲り隠居し、七月に亡き父の墓参りを理由に福知山へ戻りました。九月には夫人の郁子も看病を理由に東京を発ち、福知山に到着し、そのまま六年三月、堀村字下之地に移つて住居を構えました。八年(一八七五)八月、病状がすぐれないという理由でさらに三年延長の寄留願を提出し九月には隠居所の堀村の屋敷内に岡ノ上から朝暉神社を遷座し、能舞台は一宮神社に移設されました。

されました。

大正七年(一九一八)には東京の朽木邸から藩祖植綱公の神像や文政七年銘の御神鏡が福知山に移されて神社に合祀され、城址には宝庫が新築され収められました。昭和五九年(一九八四)福知山城の再建にあつて、大正二年に現在の小天守の石垣上に移築されていた銅門番所(旧城記念館)と呼ばれていた)が本丸広場に移築され、翌六〇年に朝暉神社は拝殿と宝庫が撤去され、天守の石垣から現在の本丸北東側に移築遷座し、境内地が整備されました。

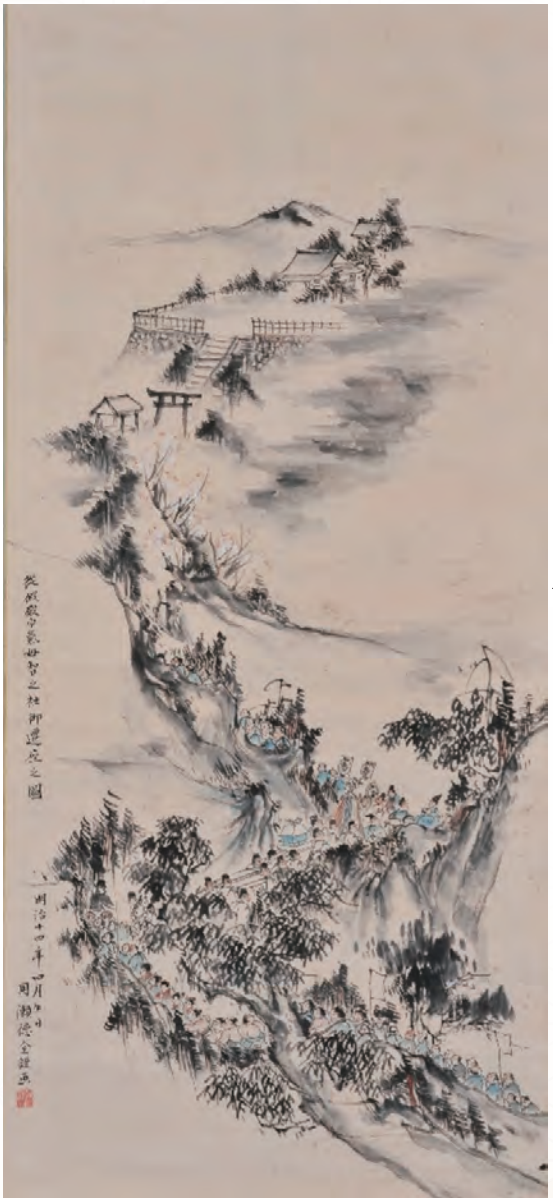
※本稿は両丹日日新聞の連載(二〇二四年九月から一〇月、全八回)「朝暉神社 創建二百年に寄せて」を編集、加筆修正したものです。

用瀬徳全画「朝暉神社城址遷座の図」

為綱は一〇年一月に東京に戻り家督した綱鑑が病気を理由に隠居を願ひ出たため再相統することになり、福知山での生活を続けることは困難となりました。明治一二年(一八七九)九月、維新後に払い下げとなつた福知山城址は福知山以外の民間の所有となつていました。荒れていく城址の様を憂いた福知山町市街の有志により地所と石垣は買い上げられました。有志惣代の藤木と志保田等は、ここに朝暉神社の社殿を移して市街の鎮守としたいと、為綱に願ひ出て、これを受けた為綱は今後の維持について協議の上、許諾しました。さらに一三年八月には福知山一九町の村社として今後維持していくことを惣代が連名で為綱に願ひ出ています。

そして、明治一四年(二八八一)四月、旧本丸の天守に朝暉神社の遷座式が挙行されました。この時の遷座の様子を描いたのが圓覚寺所蔵「朝暉神社城址遷座の図」です。旧福知山藩土用瀬徳全の画で、同じく藩士の関三蔵が圓覚寺に寄贈したものと伝わっています。七代鋪綱や二代綱張等の墓碑が伝わる縁から圓覚寺にこの軸物を納めたのでしょう。

遷座の図には、用瀬の署名の上に「從假殿宇氣母智之社御遷座之図」と記され



從假殿宇氣母智之社御遷座之図

明治一四年一月 用瀬徳全画

圓覚寺蔵

圓覚寺本堂屋根改修工事 工事進捗状況について

有限会社大下工務店
代表 大下 徹也

圓覚寺檀家の皆様には大変お世話になっております。工事担当させていただきました。令和四年十一月二十四日において圓覚寺本堂にて本契約を結ばせていただきまして、その後工事を進めています。今回の屋根工事前より幾度も現地調査、図面等を作成、写真など改修前から慎重に現地調査をし、現在も作業をさせて頂いております。

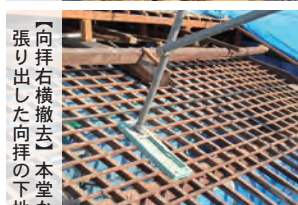
作業を進行するにつれて解ったことが、以前葺葺の状況から瓦に葺き替えられたのが、昭和三十七年と鬼瓦に刻印されていました。文化庁との打ち合わせの中で、既存の材料を修復し再利用するよう指示がありましたが、その鬼瓦も大きな亀裂があり、今後使用するには安全面で危険な状況であることを確認しております。長年において雨・風・雪に耐えていくためには、新規材料を使用することが、結



本堂全体がシートで覆われている状態



【棟降ろし】棟瓦から全ての瓦を取り外す



【向拝右横撤去】本堂から前にと張り出した向拝の下地部分



【野垂木増し打ち状況】垂木と呼ばれる下地部分の修繕



【Gムアス張り】瓦を乗せる下地部分の工事



瓦葺打ち

り、檀家の皆様にも安心していただけるよう精進してまいります。

果的には長持ちすることと思えます。瓦もできるだけ再利用するようにと勧められましたが、瓦材は新品の瓦を使用致します。屋根下地垂木、野地板、桔木、裏甲、茅負等は、すべて新規材を取付しております。彫細工のあるものは文化庁指導により、既存の形の材を本来の位置に配置し取り付けています。屋根を捲って判明したことですが、屋根下地材がかなり風化、劣化が進んでおります。そのような材料は、すべて取り除き、新しく取替工事を現在も進めております。又、以前の屋根の構造の中で、本来の位置に入っているはずの桔木、長いはずの垂木が基本通りに配置、施工がされていませんでした。現在は理想的な配置、長さ、厚み、又は増し打ちにより、より丈夫な構造にし又既存のまま施工する桁とか柱と新しくした屋根木材の色もより近い色に合わせて三回塗りの色付けしております。今後何十年又は何百年と木造の大屋根を保存していくために、様々な補強、工夫を重ねて強靱な屋根をつく

ておりますので十一月末より新規瓦の瓦葺の取付後できる所から葺き始めます。同時に向拝廻り正面の屋根も取り掛かっております。当初、文化庁からは素屋根施工（本堂を囲って屋根をする足場）を施工するように指導されましたが、足場養生にかなりの金額がかかる為、住職、総代様はじめ役員様と相談し、現在の足場とシート貼にて養生しております。来年の三月末までの完成を目指しこれからも、大下工務店施工業者一同で安全安心の工事を進めてまいります。ご質問等ございましたら建設委員会又は当工務店までご連絡をお願いいたします。

観音様めぐりの旅

総代 芦田 幸雄

観音様は慈悲を授けて下さる仏様です。仏様は中性ですが観音様は馬頭観音を除いて女性をイメージします。仏教がインドから伝わる途中の中国で馬頭観音を除いて女性化していったそうです。

皆さんご存知の西国三十三ヶ所霊場も観音様巡りです。長谷寺の徳道上人が重い病に倒れて霊界の入り口で閻魔大王に止められ現世に戻って人々の悩みや苦しみを救う事を命じられて三十三個の印を授けられましたのが起源で三十三と云う数は観音様が三十三様に姿を変えて人々を救われるとの事です。当初は一番札所が長谷寺でしたが信仰が広まらず朱印も中山寺にまとめて保管されていましたが天皇を退位した花山法皇が那智での夢枕で熊野権現から信仰を広めるように言われたことから青岸渡寺を一番とした現在の霊場巡りが始まりまったそうです。

私も二〇一八年に西国霊場巡りをしました。別に信仰心が有った訳ではなくバイクで遠出をする理由付けで始めたのですが一年間で終わらせるために最初と最後は車を使って一泊にしまして一番の那智山青岸渡寺に行きますとチョコレート色の幟が沢山立っています西国霊場巡り草創千三百年と書いて有りまして狙って始めたのではありませんが期せずし

て記念の年に当たったのでした。

札所も現在は大部分観光化しています。本来は入山料が不要なはずですが必要な箇所も多い反面整備も進み参拝が楽になりましたし、十一番の上醍醐寺が落雷で焼失して代わりに醍醐寺になつて居るのも楽です。それでも一番の難所は四番の施福寺で急な山道を急いで四十分、ゆっくり歩けば一時間近く掛かりますので高齢者には大変でした。御朱印を頂くための納経料は三百円ですが前記のように入山料に加え駐車料が必要なら一日に何か所かを回ると結構な金額になりますのでバイクは費用の面でも正解でした。又、京都の清水さんでは裏参道に回っていたら郵便配達バイクが来たので後をついて行つたらかなり上の方まで行くことが出来たのも余録でした。三十三ヶ所の観音様も色々ですが舞鶴の松尾寺だけが馬頭観音です。馬頭観音は悪人を駆逐する面と馬が現世と霊界を結ぶ生き物で有ると云うことで信仰を集めるが札所が松尾寺だけに分かるように信仰が広まるのが遅かったようです。

谷汲山の観音様は秘仏で五十年に一度の御開帳ですが前回の御開帳に丁度仕事で行きましたのでお客様に断りをして参拝しましたが大変な参拝者で人並み越しに小さな金色のご本尊がちらっと見えただけでした。仕事で関西地方の観音様は数多く

お参りすることが有りました大仏様かと云うような大きなお姿やお下げ髪、北向きとか色々な観音様を参拝したことがあります。私が一番だと思えますのが滋賀県長浜市の渡岸寺十一面観音です。国宝に指定された十一面観音は七体ありますが、その中でも一番だと言われています。渡岸寺は地名で向源寺の境内に有りまして宗派の関係で本尊は別ですので観音堂に安置されています。戦乱の多かった場所ですので住民が地中に埋めて戦火から守つたので金箔が剥がれていると伝えられています。人よりも少し大きめで腰を少しくねらせた立ち姿は何度見ても引き込まれるものがありまして湖北方面に行く際には必ず参拝するようにしていますし人にも勧めていますので皆様も機会があれば是非お参り下さい。

世界中で争いが絶えない寂しい世の中です。罪のない人々が悲惨な状況で有る事に思いをはせて少しでも助けになるように微力ながら活動に協力しています。身近にも助けを必要とする人は必ず居ますので観音様の想いに近づけたらと考えます。



能登震災 ボランティアの記

副住職 成田宗寛

令和六年一月一日、お正月元旦に発生した能登半島を震源とする大地震により、多くの寺院が倒壊また被災を致しました。特に輪島にある曹洞宗の本山、「總持寺祖院」に於いては、平成十九年能登地震で大きな被害を受け、十年をかけて復興し、昨年は瑩山禅師七百年大遠忌の法要を控えている矢先の事でありました。

現在、京都曹洞宗青年会の事務局を担当している関係で、現地で活動しているSVA(シヤンティー)国際ボランティア会からの要請で昨年計三回の支援活動に参加しました。避難所での炊き出しや瓦礫の撤去に加え、精神的ケアとしての「足湯や傾聴・お話を聞く活動」などを行い、現在も避難生活を余儀なくされている方に継続的に続けられています。

足湯やお話を聞くことも支援となります

大本山總持寺祖院も建物内外に大きな被害を受けました

一般家屋 交通インフラの被害は甚大です

總持寺山門前の灯籠も倒れました